

令和2年度訪問型家庭教育支援推進事業 第1回専門講座

1. 日 時 令和2年11月24日（火） 13時30分～16時30分

2. 場 所 田辺市スポーツパーク 多目的ホール

3. 参加者 家庭教育支援関係者・家庭教育支援チーム支援員、
家庭教育行政担当者、社会教育関係職員

合計24名



4. 内 容

13:35～ 行政説明

◆「訪問型家庭教育支援体制の構築に向けて」

和歌山県教育庁生涯学習局生涯学習課

社会教育主事

松尾 綾

○家庭教育支援の充実に向けた、和歌山県の訪問型家庭教育支援体制の構築について

①県内の訪問型家庭教育支援について

- ・家庭教育支援チームの支援について

②和歌山県の子供たちの状況について（平成31年度和歌山県生活実態調査の結果より）

- ・核家族化や共働き家庭等、家庭環境の多様化に伴い、家庭教育を行うことが難しくなっている。
- ・様々な家庭への配慮が必要となってきたことから、地域・家庭・学校のさらなる連携が必要である。

③県内の支援チームの様子

- ・訪問型家庭教育支援の類型例（ユニバーサル型、ベルト型、ターゲット型、エリア型）
- ・幅広いアウトリーチ型支援（自宅や学校、企業等に出向いて個々の保護者に届ける支援）は交流の機会の提供・保護者同士の人間関係を作ることができる。
- ・チーム同士のつながりが重要。

13:50～ 講 演

◆講 演「家庭教育支援の最前線

～これからを生き抜く子どもたちを育てる親が笑顔になる家庭教育とは～

一般社団法人家庭教育支援センター ペアレンツキャンプ

チーフ家庭教育アドバイザー 山下 真理子 氏

○概 要

①令和の家庭教育支援とは

- ・社会の変化に合わせて子育てはアップデートすべき
- ・変わってはいけないものと変わらなくてははいけないもの
- ・これからの社会を生きるための力
- ・親に何かあったときに、子供が生きていける力をつける必要がある
- ・親側の明確な家庭教育のビジョンが重要「親が学べば子も伸びる」



②家庭教育支援とは何か

- 昔は家庭・学校・地域が強い相互連携でつながっていた。今は教育の最小単位である家庭の孤立化が危機的状況にあり、家庭・学校・地域の相互連携が図れなくなっているため、子供への教育パワーバランスが崩れている
- 地域…誰かが見ているということはプレッシャーにも抑止力にもなる
- 学校…勉強・集団・異文化交流ができるところであるので、できることを学べるように最低限のマナー・規律は家庭で学ばせるべき
- 家庭…意識の高い保護者が増えることで家庭での教育力が上がる
- すべての教育のベースとなる家庭教育を支援することで、今後の家庭・学校・地域それぞれの教育力が向上する
- 家庭教育支援は地域のニーズに合わせて様々な形で取り組むことができる

③家庭教育支援の手法（ペアレンツキャンプ式）

- 訪問カウンセラーと家庭教育支援員を組み合わせる支援、さらに親による支援
- 親のカウンセリングマインド（支援姿勢）はカウンセラーの対話スキル、基本的な子育て論等を組み合わせる家庭内で実践しやすい形に変えたものが効果的
 - 不登校等の子供の課題を予防する
 - 子供の自立心や社会性を伸ばす
 - 学ぶことで親が子育てに自信が持てる
- 親のカウンセリングマインドの理論には11本の柱がある
 - (1) アクティブリスニング（効果的に傾聴する）
 - (2) アイメッセージ（目で語る、目くばせが伝わりますか）
 - (3) 命令・指示・提案を極力避ける
 - (4) 子と同レベルの言い合いをしない
 - (5) 親の問題と子の問題を分けて考える
 - (6) 先回りしてものを言って子供の経験を奪わない（子供は成功体験だけではだめ。失敗体験のチャンスを奪わないようにする）
 - (7) 不足不満を言わない（こうやればよかったのに…と言ってないですか）
 - (8) 親の価値観を押しつけない
 - (9) 悲しい時には悲しい顔で、うれしいときにはうれしい顔で
 - (10) 叱り役の立場を下げない（叱り役への不平不満を子供の前でしない）
 - (11) ターンテキング（会話のキャッチボール）
- 保護者による家庭ノートチェック法により家庭も教育にかかわる意識をもつ



④今注目されている家庭教育支援チーム

- 保護者のニーズの変化に伴い参加型の家庭教育支援だけでは、必要な家庭に支援が行き届かない。保護者のニーズが能動的に参加できるものに変化してきている。
- 家庭教育支援チームに求められる要素
- 当事者性・地域性・専門性の3つのバランスが重要

- 家庭教育支援チームの役割
- 保護者への学びの場の提供・地域の居場所づくり及び、相談対応・訪問型家庭教育支援（近年ニーズが増加）

⑤まとめ

- コロナ禍だからこそ問われる家庭教育支援の重要性、「つながり」が社会においての重要性を認識する機会となった
- 休校措置期間中は、保護者の家庭教育力が問われた期間となった
- コロナ禍でも家庭教育支援チームの目的は変わらない
- 目的達成のための手法を再検討・再構築しつつ、親子の笑顔のために支援の灯を絶やさずことなく、より家庭教育支援の輪が広がっていくことを願う

15:30~

◆ワークショップ

家庭教育支援についての日々の課題や悩みについて



以下の点について考えました

①福祉部局との連携について

- 講演から
 - チームが中に入ることで、教育と福祉など様々な行政内の部署や関係団体をつなげることができる
 - チームとして専門家や地域の人と一緒に活動することで、行政単独では解決が困難な保護者の悩みに対してもアプローチできる
 - 早期発見・早期対応が可能になる
- 福祉と連携することで貴重な情報が手に入る

②訪問時の留意点・方法について

- 寄り添う、事前情報の収集、目的共有、ニーズ、活動PR、自然な会話、ツール、ルール、同じ目線になる、言葉、服装、守秘義務、ベルト型の趣旨の理解、訪問時のきっかけ（広報紙等）、チーム員間の信頼
- 支援員のプロを目指す取組を

和歌山県は
子供を地域で育む環境づくり・
地域全体で子育て環境の充実を
めざします

